



蚊帳復活の拠点は静岡県磐田市の菊屋。「蚊帳博物館」も併設。写真左は伝統の技を極めたシリーズ「菊紋和」3畳用 ¥60,900〜。オーダー可。写真上は蚊帳素材を使った「蚊帳暖簾」。©菊屋 www.anmin.com/

クールな日本のクールな蚊帳、復活。

Text: Yoshiki Matsuura

夏の風物詩だった蚊帳が、都市生活者の日常から消えて久しい。蚊帳の最盛期は昭和40年代。その後、気密性の高い住宅やエアコン、網戸の普及によって徐々に需要が減少。「蚊帳はその社会的使命を終了した」と、伝統ある日本蚊帳商工組合が解散したのは、前世紀末=2000年のことだったとか。代わって

21世紀の現在、日本の蚊帳は海を渡り、蚊が媒介するマラリアから、アフリカの子供たちを守る使命を担っている。

そんな忘れられていた蚊帳が、最近、静かに注目されている。きっかけはインターネット。布団メーカーの通販サイトに蚊帳復活を切望する声が寄せられ、これにメーカーが応えたのが始まりだ。

建具や壁とは違い、優しく、柔らかく、空間を仕切るその機能性。包まれ、守られているような独特の空間体験。そんな蚊帳の魅力に気づいた建築家やデザイナーが、インテリアとして取り入れ始め、モダンな空間にも似合う蚊帳がデザインされるようになった。しかも伝統的な100%麻素材なら、それだけで

室温が数度下がることもある。また、麻の蚊帳にはヒーリング効果もあり、安眠グッズや瞑想グッズとしても再注目されている。もっとも伝統の蚊帳、決して安くはない。ユニセフがアフリカに送る蚊帳は10張り1セットで6000円。つまり1張り600円だが、伝統の蚊帳はその100倍以上。失ったものを取り戻すにはコストがかかるのだ。

右上：日建スペースデザイン作「カクーン」はパリ国際家具見本市にも出展。右下：洋室にもマッチするベッド用もある。



30秒に1人、消えてゆく子供たちの命。www.unicef.or.jp/cardandgift/

Design

Japanese mosquito net

「菊紋和蚊帳」

MORE TO CHECK!

感覚をデザインする、TOKUJINの創作の秘密。

現在上野・東京国立博物館で開催されている「カルティエ・コレクション めぐり逢う美の記憶」展で会場構成を手がけ好評を博しているデザイナー・吉岡徳仁。斬新き

わまらない着想でデザインという概念を拡張しつづけるクリエイターが初の語り下ろしエッセイを刊行、自身の創作の秘密を明かした。そもそも理屈やコンセプトを前面に押し出すタイプではない。本書でも平易な言葉で、「感覚」や「イメージ」をいかにつかまえるかといった創作の核心を、影響を受けた思想家、建築家、科学者の言葉などを引用しながら慎重に語り起こしてゆく。「椅子のかたちをデザインするのは

なく、座る感覚を更新してゆくこと。「私たち」が飽和状態にあるデザインの限界を見据えながら、さらにその先にある可能性を、豊富なビジュアルとともに示唆してみせる。もののデザインではなく感覚のデザイン。「みえないかたち」というタイトル

「みえないかたち」吉岡徳仁 (アクセス・パブリッシング、¥1,680)



の本意は簡単そうにきこえてとてつもなくむずかしい。